

戦前沖縄の周縁地域からの出移民

大島 崇彰

2025年9月、筆者は沖縄県国頭村を中心に巡検を行った。筆者自身これが初めての沖縄県訪問であり、到着後、空港からホテルに向かうゆいレールの車窓に浮かぶ初めての景色に気分は高揚していた。一方で、未熟ながらオセアニア研究者として参加したプロジェクトの巡検において、果たして何の貢献ができるかという不安も抱えていた。そんな中で初日に訪れた場所が、當山記念館であった（写真1）。沖縄県国頭郡金武町にあるこの資料館は、「沖縄移民の父」と呼ばれる當山久三の功績を記念して建設されたものである（写真2）。館内には沖縄の移民事業に尽力した彼の生涯とともに、沖縄移民発祥の地とされる金武町の移民史、そして沖縄から世界へと渡った人々の軌跡を記した資料が展示されていた。私はそこでかつて沖縄から南洋群島へと向かった人々の存在を改めて知ることになった。

本エッセイでは、こうした巡検での経験を踏まえ、既存の移民史研究を参照しつつ、沖縄県、とりわけ国頭村から南洋群島へ向かった人々に注目する。そしてオセアニアと沖縄の海を越えたつながりの一端を整理し、今後の研究の可能性を考えたい。



写真1 當山記念館の外観（2025年9月10日、筆者撮影）



写真2 當山記念館内にある當山久三氏の像（2025年9月10日、筆者撮影）

沖縄県からの海外移民は、1899年のハワイへの移民を端緒として本格化していった。沖縄移民研究を主導してきた石川友紀によれば、沖縄出身者の移住先は、明治から昭和にかけて、ハワイ、南米、そして東南アジアや南洋群島へと広がっていった〔石川 1992a: 3-7〕。移住先の傾向は、受入国の政治的状況や日本との関係によって変化してきたが、南洋群島への移民が特に目立つようになったのは第一次世界大戦後、日本が南洋群島を委任統治地域として以降である。ここでいう南洋群島とは、日本がドイツから占領し委任統治領とした赤道以北のミクロネシア地域である。現在で言うと、パラオ共和国、ミクロネシア連邦、マーシャル諸島、北マリアナ諸島に相当する。日本の統治下、南洋群島には行政庁である南洋庁

が設置されたほか、サトウキビ栽培を中心とした農業開発のため会社も設立された。当初は東北などから労働者が招集されたが、気候や環境への適応の困難さから、その後亜熱帯環境に適応しやすいと考えられた沖縄県出身者が労働力として招集されるようになった。その結果、南洋群島における沖縄出身者の比率は全国的に見ても高かったとされる〔石川 1992b : 532〕。また統治下の南洋群島への移動は旅券を必要としなかったため、比較的渡航の障壁が少なかったことも出稼ぎ先として選ばれやすかった要因となった。1935年時点での沖縄出身者の在外居住者数を見ても、南洋群島が最多の1万3482人と記録されている〔花木 2025〕。戦前の沖縄の人々にとって南洋群島は主要な移民・出稼ぎ先となっていたことが確認できる。

なかでも、沖縄本島北部に位置する国頭村は、多くの移民を輩出したといわれる。国頭村は戦前から山林が多く耕作に適した土地が少ない地域であり、那覇などの中心地への交通の便も悪く、沖縄本島内でも周縁的な位置にあった。水田や畑地に限られる中で、移民・出稼ぎは生活を維持するための一つの選択肢であった。資料によると、戦前の国頭村からの移民・出稼ぎ先はペルー、フィリピン、シンガポールなど多岐にわたるが、外地への移民も多く、なかでも南洋群島への移民は多数を占めていた〔国頭村海外移民史編さん委員会編 1992〕。これは沖縄全体の流れと同様と言える。とりわけ今回巡検で訪れた国頭村謝敷集落からの移民は、1925年のシンガポール渡航に始まり、1941年までに8人が確認されている。行き先は、フィリピンまたはシンガポールであった〔石川 1992c : 129〕。外地への移民に目を向けると、南洋群島から7人の引揚者の記録が残っており、いずれもパラオからの引揚げである〔石川 1992b : 535〕。統計的には謝敷集落は国頭村他集落と比較して突出して移民が多かったわけではない。しかし、謝敷集落も他の集落と同様、急峻な山地に囲まれた集落であり（写真3、4）、生活基盤は決して恵まれていなかった点を踏まえると、出稼ぎのための移住が生活戦略の一部として重要な意味を持っていたことは想像に難くない。巡検中の聞き取りでも、基本的に土地を引き継ぐ長男以外は生活の手立てが乏しく、次男以降は生活の糧を求めて南洋群島などに出稼ぎに出て漁業に従事したのだという記憶が語られた〔2025年9月10日、70代男性へのインタビューより〕。国頭村海外移民史〔石川 1992b : 536-566〕に掲載されている南洋群島に渡った人々の体験談を見ると、戦前の沖縄の困窮具合と比べて、南洋群島での生活が相対的に豊かであり、家族に十分な仕送りもできたことが語られている。南洋群島は希望を伴う移住・出稼ぎ先として認識されていたと考えられる。

しかし、こうした南洋群島への移民は、第二次世界大戦後には途絶える。戦後、南洋群島はアメリカの信託統治領となり、移住は困難になった。南洋群島から引き揚げてきた人々の中には、再移住を希望したものも多かったようだが、日本からの再移住は困難になった〔花木 2025 : 18〕。戦後の沖縄における海外移民は、代わってボリビアやブラジルなど南米へと向かうことになった。



写真 3 謝敷集落周辺の様子。写真正面は村の裏手にある丘陵。写真背後には海が広がる

(2025 年 9 月 12 日、筆者撮影)

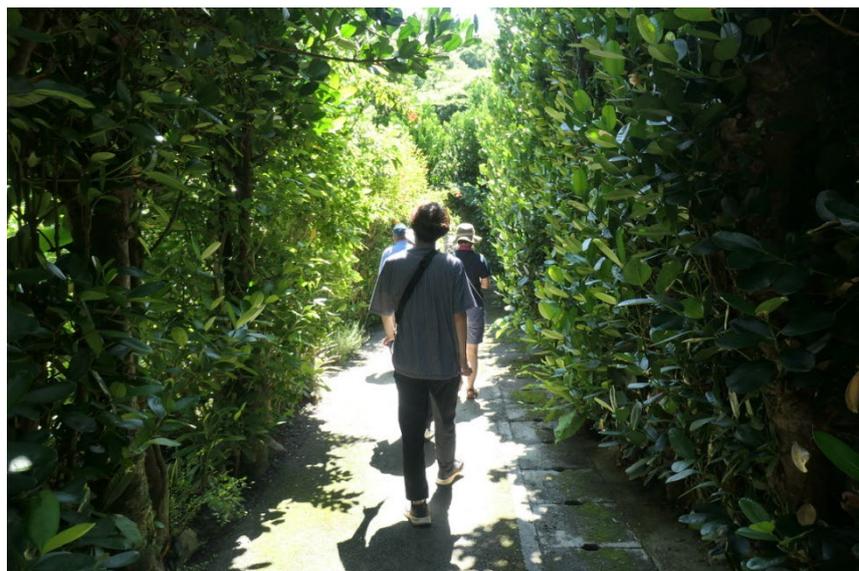


写真 4 謝敷集落内の様子。フクギ並木が集落内を巡っている

(2025 年 9 月 12 日、筆者撮影)

本エッセイでは、戦前の沖縄からの海外移民に関して、とりわけ国頭村からの移民の歴史に注目し、既存の研究と巡検で得られた知見をもとに整理した。上述のように、南洋群島への移民の歴史は、戦前に集中している。しかし、その記憶は今も人々の語りや資料の中にその痕跡を残している。かつて海を越えて働きに出た人びとのこうした記録や語りは、海域を越えて繋がるアジア・オセアニア世界という視座の重要性を改めて確認させる。

他方で、今回の巡検や資料整理を通じて課題も見えてきた。これらの記録や語りは、どうしても移民側の視点に偏りがちであり、南洋群島側の社会や人びととの関係性については断片的なものに留まっている。今後は、南洋群島における移民と現地社会との関係性に焦点を当てた人類学的研究〔例えば 飯高 2009〕や歴史学の文献などを参照しながら、南洋群島側に残る沖縄出身者の記録や記憶、さらには現地社会との関係性にも目を向けることで、海を越えた移動の意味をより立体的に捉える必要があるだろう。それがオセアニア島嶼地域の研究者としての筆者の課題である。

参考文献

- 飯高伸五 2009 「旧南洋群島における混血児のアソシエーション—パラオ・サクラ会」『移民研究』5：1-26。
- 国頭村海外移民史編さん委員会編 1992『国頭村海外移民史 本編』国頭村役場。
- 石川友紀 1992a 「沖縄県における出移民の歴史」国頭村海外移民史編さん委員会編『国頭村海外移民史 本編』pp.3-7、国頭村役場。
- 1992b 「南洋群島における国頭村出身移民の歴史と実態」国頭村海外移民史編さん委員会編『国頭村海外移民史 本編』pp. 532-566、国頭村役場。
- 1992c 「第18表 国頭村字謝敷における年次別国（地域）別海外旅券下付数」国頭村海外移民史編さん委員会編『国頭村海外移民史 本編』pp. 129、国頭村役場。
- 花木宏直 2025 『沖縄出身移民の超域的移動—南洋群島・南米・日本を往来するブラジル移民青年隊員』風響社。

(おおしま・たかあき 東京都立大学大学院)